

共に走って引き継いでいく ～バトンを渡すのではなくベストを尽くす主体者に！～

厳しい寒さも柔らぎ春の歩みも感じ始めた3月19日、第2章一冊の会第52期第2回となる櫻華塾が開催されました。

お仕事でタイに赴任しながらも、レソト王国国王陛下歓迎晩餐会の時に国歌斉唱のため帰国までしてレソト王国国歌を歌いあげてくださった鬼童さんが、タイから帰ってきたのです！尾崎行雄記念財団の応接室に集まった皆の顔にもパッと明るい花が咲いたような笑顔が溢れました！

晩餐会で素晴らしいレソト王国の国歌を歌い上げた鬼童さん。今後、国歌斉唱は佐藤玉美さんと共に歌うことが発表されました。石田理事長よりレソト王国大使館からの感謝状を贈呈され、鬼童さんから挨拶がありました。



【鬼童貴章さん挨拶】

今回閣下のご配慮でこのような大使のお名前が入った感謝状をいただくなど、人生の中でないこと。実際にどれだけレソト王国との友好につながる自分ができているのかと思うが、石田理事長がおっしゃるような1回きりで終わってしまっただけでは意味がないことなので、友好協会を守りながら、両国の発展に寄与していきたい。

小山副会長から、未来を担う青年が立ち上がることに大変意義がある。共に走っていきましょうと声がかかりました。

新井事務局次長から、3月8日国際女性デーに、参議院議員会館において第2章一冊の会第52期第1回として勉強会を行ったことの報告があり、どこの女性団体もこの意義ある日に参議院議員会館の会議室を取ろうとしている中、この日この会場で集まったことは一冊の会の歴史あってこそ。これからも灯を消さず歩み続けましょうと呼びかけられました。



新しい仲間として、斉藤明美さんが紹介されました。アメリカのテキサス州ヒューストンに在住されており、ヒューストンについて紹介がありました。家庭にいると「何故働かないの？」と言われる土地柄で、専業主婦という人があまりいないとのこと。女性の生き方に文化が与える影響は大きいと感じました。

そして、大槻会長、小山副会長から、相馬市の東日本大震災追悼式典に参加した報告がありました。ホールには被災者の親族で埋め尽くされ悲しみに溢れており、東日本大震災で犠牲になった人はこの何倍もいる事に心が痛む思いでした。黙祷の時には亡くなったご家族のお名前を呼んでいられることが大変印象に残っ

ています。6年経っても心の傷が癒えることはないのだと実感。宮城県山元町に寄った際には「7回忌に来て下さってありがとうございます」と感謝のお言葉を頂いたとのこと。私たちにできることは何かを問い続けていくことが確認され語り部の充実を誓い合いました。

国際女性デーが過ぎ、記念すべき4月10日女性参政権行使の日を迎えるにあたって、必ず押さえておいて欲しい事柄が、会長から説明されました。

- ・1893年ニュージーランドで女性が参政権を得てから今年で124年、様々な出来事があった。日本は女性参政権を手に入れるために血を流してはいない、それにはベアテ・シロタ・ゴードン女史の果たした役割は大きく、それについては「1946. 4. 10～初の婦人参政権行使と日本女性自立への出発（たびだち）」（以下「1946. 4. 10」）の259ページ、及び万葉（冊子）2号31ページを読んで欲しい。
- ・市川房枝先生も忘れてはならない。1893年、奇しくもニュージーランドの女性が参政権を得た年に生まれ、1919年に新婦人会を結成した。（1919年は一冊の会永久最高顧問の1人であり日本で初の女性国会議員になった園田天光光先生が生まれた年でもある。）1921年に渡米し、シカゴやニューヨークで働きながらアメリカの女性参政権運動を学び、1924年婦人参政権獲得期成同盟会を結成。1981年に87歳でお亡くなりになった。「婦選は鍵なり」「平等なくして平和なし、平和なくして平等なし」という信念の元に数多くの女性たちと活動を続け、大きな功績を残された。
- ・1975年のメキシコ世界女性会議に参加したことも、一冊の会の大きな転機である。市川房枝先生に、4回「行くように」と言われ、参加した。帰国後、すごい所に参加出来たのだということが分かった。
- ・「1946. 4. 10」は市川房枝先生が亡くなって18年後の1999年11月15日に出版した。368ページに編集委員が載っているが、インタビューのために何度も足を運び大変苦勞をして作った本で、表紙にもあるように第16回市川房枝基金から助成を受けている。
- ・その1999年は、一冊の会筆頭最高顧問である赤松良子先生が尽力した「男女共同参画社会基本法」公布・施行された年である。赤松先生が2003年に女性初の旭日大綬章を受賞されたことも忘れてはならない。
- ・一冊の会が設立して今年で52年となることは皆さんご承知だと思うが、1999年は終戦から54年たった。1946年に一票投じた人は20歳だったとしても、すでに73歳は過ぎている年齢であり、証言を集めるにはギリギリのタイミングであったと思っている。今では得られない貴重な証言がこの本には詰まっている。読むときは、まずは「2ページ（はじめに）」次に「339ページ（馬居先生）」3番目に「267ページ（軼から翼へ）」を先に読んでから全体を読むと重要なポイントを押さえながら読み進められる。

最後に、石田理事長から後継にバトンを渡すのではなく共に行動する事、「点から線へ、また面に広げる」事の大切さが話されました。実際に皆さんと手を取り合うことが団結であり、大切なことです。そうお話しになり、実際に手をつなぎ皆で共に走っていくことを確認しました。



「1946.4.10～初の婦人参政権行使と日本女性自立への出発（たびだち）」のブルーの本を掲げて記念撮影

文責：大槻・小山・赤田